



さとのかぜ

No.179号

千葉県いすみ環境と文化のさと

2012年4月1日発行

編集・発行 千葉県いすみ環境と文化のさとセンター

指定管理者 (一財) 千葉県環境財団

〒298-0111 千葉県いすみ市万木 2050 番地

TEL 0470-86-5251 FAX 0470-86-5252

URL <http://www.isumi-sato.com/>



最優秀賞 春のいすみ鉄道 君塚義美

「第2回いすみ環境と文化のさと写真コンテスト」には、208点の応募をいただきました。ありがとうございます。作品の内容も、里山や里海の暮らしと自然風景、祭りや農作業、植物・動物・昆虫などを撮った自然の生態など多岐にわたり、どの作品も地域の環境や生活に根ざした素晴らしいものでした。

最優秀賞と優秀賞の3作品をご紹介します。

センターHPでも紹介しています。

手賀沼親水広場でも4/14から5/13の間に巡回展示しています。



さとの環境部門 優秀賞 トンボ池 牧元晴美



さとの生活文化部門 優秀賞 春の山里 渡邊一弘

目次	1・写真コンテスト	2・センターの畑	3・ウナギ	4・地球環境問題⑩	5～7・夷隅川流域よもやま話	その8
	7・ドジョウのお話	9～11・行事報告・行事案内		12・センターの生き物		

センターの畑(初冬～春先にかけて)

春先に植付けたサトイモの収穫は12月末となくなってしまいました。4月初めに植付け、発芽までは順調だったのですが、その後、セスジズメの幼虫による食害で葉が少なくなったり、夏の日照りで枯れそうになったりして生長が遅れました。このまま、ものにならないかと思いましたが、秋口の雨で持ち直し何とか収穫ができました。



来館された方々は、よく畑を通して万木堰の方に向かわれますが、ただ畑の野菜を見るだけではつまらないだろうと思い、収穫体験ができるよう、秋に食用ナバナとそら豆を多めに植付けました。

食用ナバナですが9月に種を蒔き、順調に生長していましたが、イノシシに根を掘り起こされてしまいました。このままでは全滅してしまうと、急きょイノシシよけ用点滅ライトを設置したところ、襲来はなくなりました(たまたま来なくなったのか、効果があったのか?)。おかげさまで無事収穫体験(摘み取り)ができました。



上の写真は八千代市から来られた家族の方々です。野菜の摘み取りをするのは初めての体験らしく大喜びでした。摘み取ったナバナで何をするのかと思ったら、生で食べていました。甘い甘いと言いながら食べていたので小生も初体験、食べてみたところ本当に甘いのです、いやビックリ。後日、お礼にと絵手紙がセンターに届きました。当センターにはいろいろな趣味・特技をお持ちの方がみえ



ますが、絵手紙は初めてでした。絵も文字も素晴らしいものでした。

センターに掲示してありますので、来館の際はぜひご覧下さい。

そら豆は芽が少し出たところを、10月の台風による大雨で根が洗われ、種が地表に露出してしまいました。種を再度地中に埋め戻した後から昨年末までは順調に育ったのですが、今年に入り連日の寒波や強い北風、降雪で畑の土手に植えたそら豆は枯れてしまいました。



これまでかと思ったら、枯れた根元から新しい芽が出てきました。さすが越冬して実を生らせるそら豆ですね、しぶといですよ。畑のそら豆に比べ土手のそら豆の収穫時期は多少遅れそうです。6月頃に「そら豆収穫体験イベント」を予定しています。時期が来たらブログなどでお知らせします、ぜひご参加下さい。



ニンジン(ニンジン)は葉が10cm位伸びたところでも何者かに葉を食べられてしまいました。一番大事な生長期に葉がなくなってしまったので、大きく生長することが出来ず、えんぴつサイズのできとなりました(でも味は甘い!)。ウサギが食べたのであろうというのが、大方の職員の見立てでした。確認してみようと監視カメラを設置してみました。設置後の畑には何も現れませんでした。鳥は食べないでしょうからウサギですかね。



ウナギ ～懐かしの獲物～

ウナギは、日本全国に生息していますが、その生態はあまり知られていないようです。高タンパクで消化も良く、蒲焼、鰻丼などで、古くから日本人の食文化に関わりを持つ魚と言えます。土用の丑の日や夏バテ防止に食べますが、旬は、冬眠に備えて養分を蓄える晩秋から初冬にかけての時期です。



小学生のころ（昭和30年代ごろ）はウナギ捕りを、家の近くの池、堰、用水路などで容易に行うことができました。漁法は、アメリカザリガニやミズを餌にしたブッコミ釣りや置き釣り、水路の縁にできた横穴にウナギが隠れるので、その穴に餌の付いた針を仕掛ける穴釣りでした。夕方から2時間程度が良く釣れる時間でした。また、けえっぼり（方言で、水溜りの水をバケツで汲みだし魚などを捕まえること。水溜りは、段差のある水田の片隅や用水路の水の澱んでいるところで、上下が浅瀬になっている。）を行い、ウナギ、フナ、コイ、テナガエビ、ドジョウ、モクズカニなどを捕まえました。現在は、農業基盤改良整備が行われ用水路はコンクリートで造られ水溜りもなくなり、その遊びも出来なくなりました。

殺生好き（魚取りの好きな人のこと。）の大人たちは、堰の水を干して腰ぐらいの水深になると堰の中に入り、主にウナギ、エビ、コイなどを捕まえていました。ウナギの捕獲には、鰻鎌（ウナギかま）を使い泥の中にいるウナギを引っ掛ける「鰻搔き（うなっかき）」を行っており、子供の頃は憧れていました。



鰻鎌の先端

堰の水干しは、堰揉みとも呼ばれ、大勢で堰の中を歩き回ることによって、底に溜まった泥を浮き上がらせ、堰の底にある栓（こま、泥栓な

どと呼ぶ）を抜き、水と共に泥を流します。そうすることによって、堰に泥が堆積し水深が浅くなることを防ぎます。堰の縁や底が乾燥圧縮させることによって、崩れない堰にもなるのです。そのついでに、魚やエビを捕まえられる一石二鳥の仕事でした。

農業用水施設の改良が進み堰水は補充的な役割となり、多くの堰では堰干しが行われなくなりました。それとともに、鰻搔きの姿も見かけなくなりました。センターには50年以上前の鰻鎌を展示しています。また、第2回いすみ写真コンテスト さとの生活文化部門 特選作品 「童心に戻って」には、そんな今では珍しくなった堰干しの風景がおさめられています。



「童心に戻って／神戸一章」

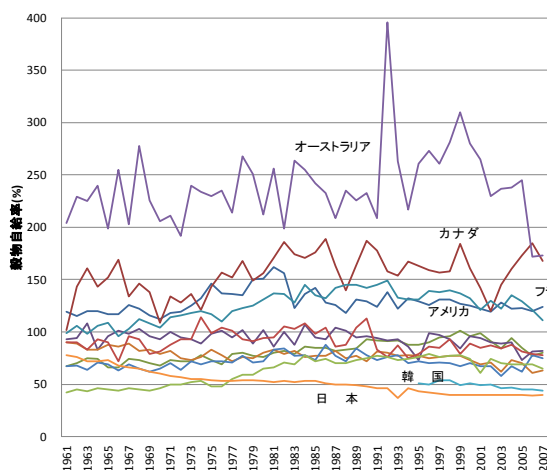
写真中央、麦わら帽子の人が持っているのが「鰻鎌」です。見たところまだ新しい鰻鎌なので、現役で活躍しているところもあるようです。

一方、美味いと持てはやされるウナギですが、ウナギを虚空蔵菩薩の使いとして、食べることを忌避するという信仰（鰻食物禁忌）、伝承を持つ地域もあるようです。私は、子供が生後8ヶ月～10ヶ月の頃に「瘤の虫封じ」のため虚空蔵菩薩に願かけ（御宿町上布施の真常寺・縁日3月13日にて）を行いました。そして、母親から6年間ウナギを食べてはいけないと言われましたが、しかし、うまいものには目がないということでしょうか、旅行先で食べてしまい再度願かけを行ったことがあります。また、大多喜町のある地域でも虚空蔵菩薩を信仰しているため食べない風習があります。

地球環境問題のいろいろ ⑩～食料自給率と農地～

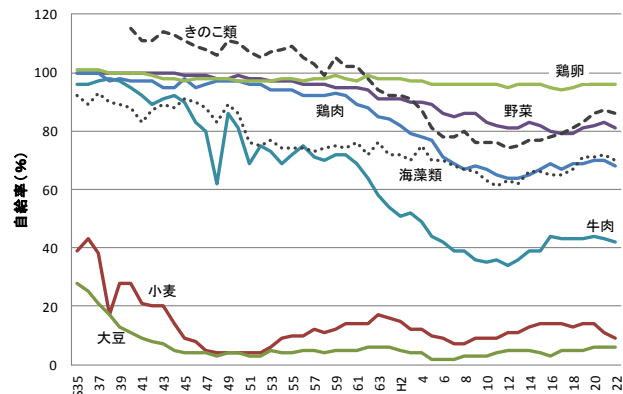
前回、地球環境問題の一つとして人口増加を取り上げました。人口が増えれば生きるためには水と食料が必要です。日本は人口が減少していくので食料供給量は徐々に減っていくのですが、少し現実のデータをみることにしましょう。

まず、国別の穀物自給率を見てみましょう。農林水産省が FAO(国連食糧農業機関)の資料を基に平成 22 年6月時点での穀物自給率ランクを試算しています。トップはアルゼンチンで 306%、以下パラグアイ、ウルグアイ、カザフスタンと続いてオーストラリアが 175%となります。日本は穀物自給率で 177 の国・地域中 124 番目で 28%、OECD 加盟 30 か国中 27 番目という状況です。いわゆる先進国(OECD 加盟国)で日本より低い国はポルトガル 24%、オランダ 16%、アイスランド 0%となっています。0%の国はアラブ首長国連邦など、全部で 15 か国ほど存在しています。



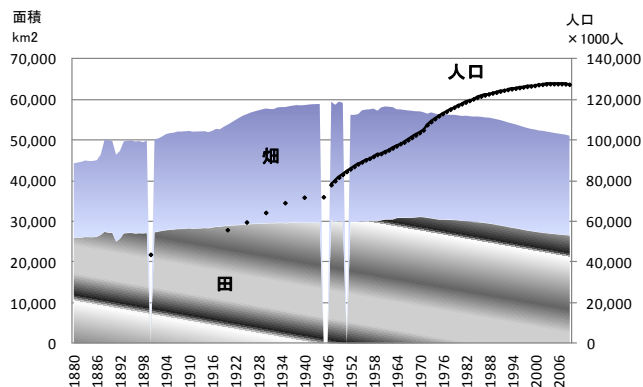
いくつかの国について、1961 年から 2007 年までの食料自給率(カロリーベース)の推移を農林省の試算結果でグラフにしました。オーストラリアやカナダなどは大きく変動しているのがわかります。100%以上のカロリーは当然、食べているのではなく外国への輸出に回っているのです。他の国でも多少の変動はありますが、一番下の日本はなぜか順調に下がり続けています。もっともこの時期は日本も人口増加していた時期ですから、生産量が同じならば食料自給率が下がるのは当然の結果ではありますが、限られた農地では生産量にも上限があることから輸入に頼らざるを得ませんね。

次に昭和 35 年度から平成 22 年度まで、日本における品目別の自給率の推移をグラフにしました。



まず気の付く点は一様に右肩下がりではないという点です。鶏卵は昭和 40 年の声を聴くと 100%を切っていますが、最近では 96%で横ばい気味。大きく下がったのは牛肉ですが、これは日本人の食習慣にも起因している可能性が大きいですね。大豆は 10%以下が続いています。小麦も 10%付近を行ったり来たり。共通する点は、一時期下がり続けた自給率がやや回復しているか横ばい状況が続いているという点、そしてどれも 100%に達していないという点です。主食のコメは 100%という数値が公表されています。

農業生産に欠かせない農地はどうなっているのでしょうか。



1880 年から 2009 年までの地目別民有地面積から田と畑、そして前回示した人口の推移を重ねてみました。人口は増えているのに 1960 年代からは農地の面積が減少しています。これでは一人が食べる量を減らさない限り食料の自給率は落ちていきますね。しかし、日本の国土には限りがあります。家を建て道路をつくり、工場を建設していけば残された山林を農地に代えることはなかなか難しいことも理解できますね。

[資料]

- 1.食料需給表(農林水産省 2011)
- 2.日本の長期統計系列(総務省統計局)
- 3.日本統計年鑑(総務省統計局)

■夷隅川流域よもやま話-その8・哺乳類①-

夷隅川流域には、多くの野生動物が暮らしています。センター周辺でも、タヌキ、ノウサギ、アナグマ、イタチ、イノシシ、アライグマなどの姿を時折り見かけたり、行動の痕跡を発見することがたびたびあります。イネや野菜の農作物が荒らされることもあります。これら主な哺乳類・鳥類は、剥製としてセンターに展示しています。(展示している哺乳類の剥製は、シカ、イノシシ、タヌキ、アナグマ、ウサギ、イタチ、テン、リス、アライグマ、ハクビシン、キョンです。)今回は、哺乳類について紹介します。

・日本と千葉県の哺乳類

動物というと四足(よつあし)の動物をすぐに思い浮かべる方が多いと思いますが、いわゆる動く生きもの、動物には、多くの種類がいます。前号で取り上げた千葉県のレッドデータブック「千葉県の保護上重要な野生動物」では、哺乳類、鳥類、爬虫類・両生類、魚類、昆虫、クモ類、陸産及び陸水産甲殻類、十脚甲殻類、多足類、貝類という

ように分類して取り上げられています。普段あまり気がつかない地味な動物たちも、生態系の中では重要な役割を果たしています。忘れないようにしたいものです。

哺乳類は、日本列島に134種、千葉県には34種生息すると報告されています。これには野生状態のイヌ、ネコが含まれています。

表-2 陸生哺乳類の生息種数

	日本列島 2005 年	千葉県 2011 年
在来種	107	22
外来種	27	12
計	134	34

他に海の生物も含めると、一般保護生物としてスナメリがいます。

センターでは、昼間にイタチが溝などをよぎる姿を見かけられることがあります。イノシシ、タヌキ、ノウサギは、夜間に多く活動しており、仕掛けたセンサーカメラに撮影されています。主な野生動物を説明します。

・イノシシ (英)boar

「千葉県では、イノシシは外来種です」と聞いて、えっ?と思う方は多いと思います。実は房総半島では1970年代に一度絶滅しており、80年代後半に他の地域から人が連れてきて放したものが、増えているといわれ、南房総で最近、個体数と農林被害が増えてきています。国内間でも、別の地域から移動された場合外来種と呼びます。

イノシシはブタの祖先であるといわれ、家畜の豚はすでに新石器時代、紀元前2500年前に飼われていて古代ギリシアなどでも盛んに食べていたようです。日本でもいつ家畜化されたかについては、はっきりしないようです。猪は美味なので、縄文時代の遺跡

表1 千葉県産陸生哺乳類の生息種リスト(2011年現在:34種)

目名	科名	和名	学名	千葉県レッドデータブックのカテゴリ*	外来種**
食虫目	トガリネズミ科	ニホンジネズミ	<i>Crocidura dsinezumi</i> (Temminck, 1842)	□	
		ヒメズ	<i>Urotrichus talpoides</i> Temminck, 1841	□	
		アズマモグラ	<i>Mogera imaizumi</i> (Kuroda, 1957)		
翼手目	キクガシラコウモリ科	キクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus ferrumequinum</i> (Schreber, 1774)	C	
		コキクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus cornutus</i> Temminck, 1835	C	
ヒナコウモリ科	アブラコウモリ	アブラコウモリ	<i>Pipistrellus abramus</i> (Temminck, 1838)		
		ヒナコウモリ	<i>Vespertilio sinensis</i> (Peters, 1880)	情報不足	
		モモジロコウモリ	<i>Myotis macrodactylus</i> (Temminck, 1840)	B	
		ユビナガコウモリ	<i>Miniopterus fuliginosus</i> (Hodgson, 1835)	□	
霊長目	オナガザル科	ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i> (Blyth, 1875)		
		アカゲザル	<i>Macaca mulatta</i> (Zimmermann, 1780)	○	
齧歯目	ネズミ科	マスカット	<i>Ondatra zibethicus</i> (Linnaeus, 1758)	○	
		ハタネズミ	<i>Microtus montebelli</i> (Milne-Edwards, 1872)		
		カヤネズミ	<i>Micromys minutus</i> (Pallas, 1771)	□	
		アカネズミ	<i>Apodemus speciosus</i> (Temminck, 1844)		
		ヒメネズミ	<i>Apodemus argenteus</i> (Temminck, 1844)	□	
		ドブネズミ	<i>Rattus norvegicus</i> (Berkenhout, 1769)	○	
		クマネズミ	<i>Rattus rattus</i> (Linnaeus, 1758)	○	
ハツカネズミ	<i>Mus musculus</i> Linnaeus, 1758	○			
リス科	ニホンリス	<i>Sciurus lis</i> Temminck, 1844	C		
兎目	ウサギ科	ニホンノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i> Temminck, 1845		
		アナウサギ	<i>Oryctolagus cuniculus</i> (Linnaeus, 1758)	○	
食肉目	イヌ科	アカギツネ	<i>Vulpes vulpes</i> (Linnaeus, 1758)	B	
		タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i> (Gray, 1834)		
		イヌ	<i>Canis familiaris</i> (Linnaeus, 1758)	○	
		アライグマ	<i>Procyon lotor</i> (Linnaeus, 1758)	○	
		ネコ	<i>Felis catus</i> (Linnaeus, 1758)	○	
イタチ科	ニホンイタチ		<i>Mustela itatsi</i> Temminck, 1844		
			<i>Martes melampus</i> (Wagner, 1840)	□	
ニホンテナ	ニホンアナグマ		<i>Meles anakuma</i> Temminck, 1844	C	
			<i>Paguma larvata</i> (Smith, 1827)	○	
ジャコウネコ科	ハクビシン		<i>Paguma larvata</i> (Smith, 1827)	○	
偶蹄目	シカ科	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i> Temminck, 1838		
		キョン	<i>Muntiacus reevesi</i> (Ogilby, 1839)	○	
イノシシ科	イノシシ		<i>Sus scrofa</i> Linnaeus, 1758	○***	

から鹿に次いで多く出土する獣骨であるといわれています。江戸時代後期には「山鯨」と呼ばれました。最近ではフランス料理の用語で「ジビエ」と呼んで、狩猟による野生肉料理をおしゃれに有効利用している人たちもいます。

ウシ目イノシシ科に属し、日本のイノシシはニホンイノシシとリュウキュウイノシシの2亜種に区別されます。太い胴に短い四肢、短い首がついた体形が特徴で、頭胴長 1.2~1.5m、体高 60~75cm、体重 50~100kg。メスはオスよりも小型です。体色は灰褐色から黒色または茶色です。

イノシシは古代バビロニアなどでは神聖な獣とされていたのですが、神聖なものへの不可触性が、汚れたものへの不可触性に移行し、豚にまで及んだようです。それがユダヤ教、イスラム教における豚の食用のタブーを生み出した原因だといわれています。

牙は終生のび続ける鋭いものです。嗅覚に優れて、イモやキノコなど地中の食物をにおいて



探し出し、夕刻から翌早朝にかけて歩き回るといわれます。植物質を中心に、動物質をも食べる雑食性で、堅果、根、茎、穀物などのほか腐肉、鳥卵、トカゲ、昆虫なども食べます。センターでは土を掘って食べ物を探したラッセル痕が林道沿いで頻繁に見られ、湿性生態園では泥浴びの跡も良く見られます。泥浴びをする場所は「ヌタ場」と呼ばれ、谷筋の一定の場所が繰り返し使われます。そこで体中に泥を塗ったイノシシは、次に近くの決まった木に体をこすりつけて泥とともに汚れや外部寄生虫を落とします。木には特徴的な跡が残されます。センターの湿性生態園デッキや植物にも泥の跡が付いて通り道だと類推できます。昨年もセンターの田んぼが荒らされましたが、食べるばかりでなく寝ころんでイネを倒す行動は大変迷惑なものです。

雌は、平均して 5~6 子出産



します。子は生後 5 ヶ月までは体に縞模様があって、「瓜坊(うりぼう)」と呼ばれます。イノシシは多産ですが、高い乳児死亡率への適応だと考えられます。繁殖期以外は、母親とその年生まれた子は数頭の群れを形成して生活し、成熟した雄は単独で行動します。イノシシは出産用の巣の他、地面に浅いくぼみを掘り草や枯枝を敷いて睡眠用の巣もつくるといいます。

イノシシの行動半径は大きく、においに敏感で警戒心が強いので捕獲は簡単ではありません。追い払うため臭気の強い油やトウガラシのエキスを耕地の周囲にまいたりします(カガシ)。耕地を木柵や土堤、石垣などで囲み、侵入を防ぐことも行います(シシドテ、シシガキ)。あの手この手苦勞の末、最近では、電気柵がかなり有効な手段として使われています。捕獲には、ぬかをエサに仕掛けた「箱わな」が一番有効な方法となっています。

・タヌキ (英)raccoon dog

タヌキはイヌ科に属する動物で、頭胴長 50~58cm、尾長 15~19cm。体重 3~6kg。毛が深いため体はずんぐりに見えます。四肢は比較的短く、尾も短いが長毛が房状に生えます。顔は正面から見ると円形にちかく、耳が丸く小さく、鼻先がとがるが長くはありません。目の周りが黒く、目の上から鼻すじが白っぽく見えます。

森林にすみ、川や沼近くの落葉樹林を好むようです。夜行性で、日中は巣穴で休息します。巣穴は岩の陰、自然の穴や樹洞



などで、自分で掘る穴は少ないようです。ササヤブ、土管、蓋のあるU字溝なども休憩場所に使い、センターでも田のあぜやクロヌリしたての場所によく足跡が残っています。

巣穴には1~数頭の家族が見られ、巣穴の内部はつねに清潔に保たれています。糞(ふん)は巣穴の外の一定の場所に決めて排泄するので、「ため糞」といわれます。センターでは、ホテイチク林の中に見られます。

食性は雑食で、動物質のもの(カエル、昆虫、

へビ、タニシ、カニ、魚、小鳥、ネズミなど)と、植物質のもの(ピワ、ナシ、リンゴ、カキ、ブドウのほかどんぐり、樹の種子、地下茎など)を食べます。ミミズ類や昆虫類の幼虫など土壌動物が最も多い食べ物です。

タヌキは木登りをすることもあり、冬ごもりする習性もイヌ類としては変わっています。秋のうちに脂肪として体内に蓄えるため、冬は体重が重くなります。5~6月に4~5頭の子を産むことが多く、オスも子育てに参加します。「タヌキ寝入り」と言われる行動は警戒行動であり、脳は完全に目覚めた状態にあることが判明し、失神でなく、本能的にある種の刺激に応じて死んだふりをするのではないかと

ともいわれます。

タヌキの毛皮は良質で、襟巻やコートにされ、毛は毛筆用の原料とされます。また、皮は鍛冶屋のふいごに使われたようです。ムジナはイタチ科のアナグマのことでしたが、現在ではタヌキとアナグマの混称になっているようです。いすみでは、夜間のそのそと道路をよく横切るので、交通事故にあってしまった姿もまだ頻繁に見かけます。

今回は、他の哺乳類たちを取り上げます。

参考:千葉県レッドデータブック 動物編

千葉県の自然史 本編6 千葉県の動物 I 他

ドジョウのお話

ドジョウは河川中・下流域の谷津田及び平地の田んぼや沼など、日本各地の身近な水域に生息する、コイ目ドジョウ科の淡水魚です。水底に棲み、ひげを使って小動物や藻類を食べる雑食性で、春から夏にかけ稲苗や水草に産卵をします。泥底を好み、高水温にも強い魚です。また、空気を消化管内に取り込むことで補助的な腸呼吸(オナラのように見える)をおこないます。そうしたことから、かなり有機物の多い水路や水の少なくなってしまう田圃でも生きのびることができるなど、比較的強い生命力をもった生き物です。



ドジョウ

国内に生息するドジョウ類は11種とされ、センター近辺では、このドジョウの外にシマドジョウとホトケドジョウの2種の生息を確認しています。



シマドジョウ



ホトケドジョウ

この2種は、私たちの生活に身近な存在だったドジョウとは人との距離や生息環境等を異にしており、砂礫底を好み高水温に弱く両ドジョウとも清流を好みます。ホトケドジョウは浮き袋が発達し、水底では無く中層に生息します。このことから汚濁源の少ない河川上・中流域の丘陵や台地廻りの湧水が流入する砂礫がちの細流・小河川を生息場所に、人知れずひっそりと暮らしています。

顔立ち	外見・生態
 <p>ドジョウ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ひげは5対10本 ・腹部は白いが全体的には黒っぽい ・よりウナギに似た動き
 <p>シマドジョウ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ひげ3対6本 ・肌色の体色に黒色斑の太いライン ・背鰭前の背中に暗色斑が並ぶ ・口から目元にかけて暗色斜体がある
 <p>ホトケドジョウ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ひげ4対8本 ・目先にツノ状の2本ひげ ・体色は全体に淡い黒色 ・ずん胴で一見ヨシノボリ風 ・オナラをしない(腸呼吸をしない)

ドジョウが私たちの生活に身近な存在であった頃、初夏の夜の楽しみの一つとして、一面水の張られた田植時期(昔は6月頃)の田んぼに出かけ、カンテラ(カーバイトランプ)。

筒下にカーバイトの塊を入れ、筒上内の水を少量ずつ滴下し発生したアセチレンガスを燃焼し灯りとした)の灯りでドジョウを誘い出し、棒の先にたくさんの針を付けた道具(1メートルぐらいの竹の先に、トタン製枠で固定した大きな縫い針様の針をたくさんつけたもの。昭和30年代に市販されていた)で刺し獲るといったものがありました。またドジョウの動きまわる出水時や産卵期には、畔の水路に竹ひごを編んで作られた「せん」(雑魚を獲るための道具で、竹ひごでつくられている。下の部分が漏斗状の入り口となっており一旦入りこむと出られない構造となっている。)を仕掛けてドジョウを捕まえました。さらに、水のない冬田ではドジョウ穴を探し出し、これを掘り返してのドジョウ獲りを行っていました。このように、ドジョウ獲りは四季を通じ年中行事的な遊びとして、生活の中に組み込まれていました。



そうした時代の水田や畔の水路には生命の

にぎわいがあり、ドジョウ同様に今では数を減らしたトウキョウダルマガエルやトノサマガエル・メダカ・ヒル類・水生昆虫など様々な生き物達で溢れかえっていました。

童謡「どんぐりころころ」「蛙の笛」「メダカの学校」「ふるさと」などにも歌われているように、これらの生き物達との共生は日本人らしさを育み醸成する心の糧として、あるいは自然のバロメーターとして長い年月をかけ自然との折り合いをつけながら築きあげられた「さと文化」の重要な構成要素でした。

私達と長いお付き合いをこれまでしてきたドジョウをはじめとするこれらさとの生き物達がどんどん減ってきています。要因の一つに、圃場整備があげられています。かつて産卵・子育ての場であった水田と河川に通じる水路構造の改修や水管理面の配慮などの工夫を始めとした生き物にも優しい取り組みを進め、昔ながらの里山・田んぼ・水路の環境が繋がった「さとの環境」を復元させることも生物の多様性を保護する観点から求められてきています。

《 行事報告 》

12月22日

米作り5・おかざりを作ろうー鳥居形編ー



午前、午後合わせて大人15名の参加がありました。正月飾りは様々な形がありますが、夷隅周辺の地域では「鳥居形」と呼ばれる形が一般的な飾りだそうです。ワラはセンターで育てた、丈が長い「京都神力」通称「京神」を青刈りしたのを使います。鳥居形の講座開催は今年が初めてでしたが、例年の輪飾りより簡単に作れ、また形を目新しく感じる人もおり、好評となりました。

12月23日

米作り5・おかざりを作ろうー輪飾り編ー



午前、午後合わせて大人39名の参加がありました。使うワラは鳥居形と同じく「京神」です。当センターで1、2を競う人気行事です。リピーターの方も初めての方も入り混じっての講習です。初めての方には難しい作業もあり、そんな時は熟練したリピーターの方たちが教える場面もありました。終了後には、「やっと一人で作れるようになった」「1回では覚えきれないので来年も挑戦したい」といった、リピーターと初参加の方の2つの声が聞こえてきました。

1月15日

そばうち体験



大人 18 名の参加がありました。今年から会場が岬公民館に変更になりました。

初心者にもつながりやすくするため、センターのそばうちではそば粉7割、小麦粉3割弱の配合です。そば粉と小麦粉を合わせてふるったら、早速開始です。

水を加える時は、用意した量の半量ずつ加えていきます。水を加え過ぎないように調節が必要です。水の量は、その日の湿度によって微妙に変化するそうです。

太すぎたり、短くなった人もいましたが、皆さん美味しく自分のそばを味わうことができたようです。

1月21日

冬の星座観察



当日はあいにくの雨で、室内プログラムのみとなりましたが、大人4名、小人5名、計9名の参加がありました。

まずは、パソコンを使って星座の解説を行いました。今の季節、どの時間にどんな星が見えるのか…時間を追って解説がありました。

お話だけじゃ残念ということで、ちょっぴり宇宙に関する工作を行いました。その名も「ふうせんロケット」ツイストバルーンに画用紙で作った羽をつけます。皆さん楽しく作製し、楽しく飛ばして遊べました。雨でどうなることかと思いましたが、工作のお陰で楽しいお土産も出来ました。

1月29日

つるでかごを作ろう



大人 19 名の参加がありました。快晴の空の下での開催でしたが、朝9時の気温は-1℃と大変寒い日でした。

つるは、主にクズを採集します。かごを作るのには、アケビやフジといったツルのほうが上等ですが、作り方の勉強をするのにはクズのツルでも十分立派なものができます。

今回は参加者19名中、14名が初心者だったのですが、皆さん大変器用でつまることなく制作が進みました。予定より1時間以上早く終了したので、最後は囲炉裏を囲みながら作品の発表会をおこないました。ここが上手くできた、できない、ここが好き、ここを見て！と、和気あいあいと自分の作品を見せ合いました。

2月11日

水辺の鳥の観察



大人9名、小人1名、計10名の参加がありました。

センターを出発し、椎木堰、夷隅川河口、大正堰、太東崎灯台で観察をしました。水鳥の種数が予想より少なめでしたが、33種の鳥が観察できました。

観察出来た鳥：カイツブリ、ウミウ、カワウ、コハクチョウ、カルガモ、ハシビロガモ、マガモ、コガモ、オナガガモ、ヒドリガモ、ホシハジロ、セグロカモメ、ゴイサギ、アオサギ、オオバン、タシギ、ミサゴ、トビ、ノスリ、チョウゲンボウ、コジュケイ、キジバト、カワセミ、ヒバリ、ハクセキレイ、タヒバリ、モズ、イソヒヨドリ、ツグミ、メジロ、スズメ、ムクドリ、ハシブトカラス

2月12日

米作り6・わらでぞうりを作ろう



大人10名の参加がありました。寒い日でしたので、皆さん囲炉裏を囲んでの制作です。

ぞうりを作る台にひもをかけ、ワラを巻いていきます。力加減が難しく、なかなか均一な幅にできません。ワラを巻きつけ終わったら、布の鼻緒を取りつけて完成です。

「難しい」「幅が揃わなかった」など、難易度の高い講座でしたが、最後には皆さん世界でたった一つ、自分だけのわらぞうりを作ることができました。

2月26日

椿の里を見てみよう



大人10名の参加がありました。大原は、ツバキでも知られています。椿の生垣は街並みとして平成のはじめの頃よりも、残念ながら衰え減少してきているようです。今回は、文人たちが利用し、昭和初期の避暑別荘地として栄え始めた時代も想像しながらの、椿の里歩きを行いました。

椿の里や大原の海岸と散策した後は、椿公園に出かけました。こちらは植栽されたたくさんの椿があります。残念ながら花はまだ少なめでした。途中、突然現れたキョン2頭とノウサギの姿が観察できました。

3月3日

トウキョウサンショウウオの卵のうを見つけよう



大人4名、小人2名、計6名の参加がありました。

まずは図書室で、カエルの卵とサンショウウオの卵の違い、どこで暮らしているのかなど、簡単にトウキョウサンショウウオのお話をしました。その後、長靴をはいて湿性生態園まで、トウキョウサンショウウオの卵のうを観察に出かけました。

卵のうを観察しながら、トウキョウサンショウウオの現状、天敵についてお話しました。同時期に産卵する、ニホンアカガエルの卵かいも観察して、終了となりました。

3月10日

花炭を作ろう



雨のため開催日順延となりましたが、大人10名、小人3名、計13名の参加がありました。

室内で花炭の説明を受けた後、ふた付きの缶に花炭にしたい材料を詰めます。マツボックリ、クリのイガ、ひょうたん、椿など思い思い詰めたら、おき火にした焚き火の中に缶をくべます。熱している待ち時間には、ススキとオギを使ったホウキ作りを行いました。

60分~90分ほどで花炭が完成しました。思い通りの作品に仕上がった人も、もう一步の出来栄えだった人もいましたが、皆さん楽しんでいただけたようです。

3月24日

早春の草花、小さな世界を自然観察



朝は小雨が降っていましたが、開催時間には止み、大人5名、小人1名、計6名の参加がありました。
 ルーペを持って、日頃はあまり見つめない花や葉をじっくり観察するのが今回のテーマでした。太陽が出ず、オオイヌノフグリやタンポポは花を閉じたままでしたが、太陽が出ないと「省エネ」をする植物もあるということを見発見確認できました。他にも、シュレーゲルアオガエルの合唱やヒサカキの花の臭い、スマレの花やフユイチゴの葉、ヒメオドリコソウの花、ヒガンマムシグサなどを観察しました。

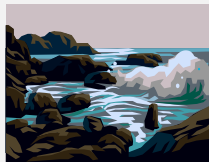
☆行事内容やセンターの日常を、センター日誌 (<http://isumisato.exblog.jp/>) にてご覧いただけます

これからの行事案内

5月 (3月1日から受付開始)

●山田の穴堰と鉄造仏頭を訪ねる小さな旅
 12日(土)9:30~12:30 定員20名 雨天13日
 珍しい穴堰と鍾乳石、郷土資料館、鉄造仏頭を訪ねてみよう!
 持物:飲物、山歩きできる服装、解散後持参昼食可

●太東の岬で海辺の自然を観察しよう
 26日(土)10:00~12:00 定員20名 雨天27日
 太東の岬周辺を歩いて、海辺の自然(植物・地質など)を観察しよう
 場所:太東ハイキングコース周辺
 持物:飲料、歩きやすい服装



6月 (4月1日から受付開始)

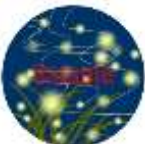
●ホテルの里でホテルを見よう 雨天中止
 2日(土)18:30~20:00 定員20名
 ※ホテルの発生状況により日程変更有
 ゲンジボタルの集団発光を、山田・ホテルの里で観察しよう!



●岩船で磯のいきもの観察をしよう
 3日(土)9:30~12:30 定員20名 雨天中止
 磯にはどんないきものがいるかな? 観察しよう!
 場所:いすみ市岩船の磯
 持物:飲物、水の中で履く靴(サンダルや長靴、かかとの出ている靴は不可)、軍手



●センター内小川でのホテル観察 ① ②
 9日(十)・10日(日)19:15~20:00 定員20名
 小雨決行
 ゲンジボタルが今年もセンターの小川で見られるかな?
 持物:特になし



4月 (2月1日から受付開始)

●タンポポや小川の生き物を観察しよう
 7日(土)10:00~12:00 定員20名 雨天順延8日
 センターの春のいきものたちを観察しよう!
 持物:歩きやすい服装



●万木城の歴史と里山の自然観察
 21日(土)10:00~15:00 定員20名 雨天中止
 春の万木城周辺の歴史・自然を再発見しましょう。
 場所:スポット地区①万木の丘
 持物:弁当、飲料、山歩きできる服装



●米作り1・田植え体験をしよう 小雨決行
 29日(日)9:30~14:00 定員30名
 秋の収穫への第一歩。裸足で田んぼに入り、自分の手で苗を植えよう!
 参加費:100円
 持物:弁当、飲料、着替え



7月 (5月1日から受付開始)

●ハス観賞週間
 7日(土)~13日(金) 随時 見学自由
 日の出と共に開花するハスの花を観賞しましょう



●海辺の植物観察
 21日(土)9:00~11:30 定員20名 雨天22日
 センター周辺とは違う海辺の自然を見てみよう
 持物:飲物、帽子



●ミニプログラム・スペシャルウィーク「さとの夏遊び」
 31日(火)~8/4日(土) 当日受付
 虫採り、ガサガガ(水辺のいきもの採り)水鉄砲等、さとの夏遊びをしましょう!
 持物:飲物、帽子などお問い合わせ下さい



センターの生き物たち



クロモジ/クスノキ科

本州の関東・中部地方以西に分布する落葉低木です。産地の落葉樹林内に自生し、庭木としても植栽されます。枝や葉に芳香があり、材は楊枝（ようじ）に利用され、いすみ楊枝クラブでも、クロモジを使った楊枝作りを行っています。

花は雌雄異株。4月ごろ葉と同時に黄色い花を咲かせます。まだ他の葉や花が少ない時期、林の中で小さな黄色い花がパッと目を引きまします。



ホソミオツネトンボ/アオイトトンボ科

未成熟期は地味な枯れ草色の体色ですが、成熟するとオスは鮮やかな青色、メスはわずかに青色になります。

成虫で越冬し、陽春～晩春に水辺にやってきて交尾、産卵します。卵は、水面に張りだした植物の葉や茎に産卵します。

センターでは、田植えが終わった頃から、稲につかまり産卵している姿に出会うことができます。田んぼの畦からそっと、探してみてください。

いすみ楊枝 —千葉県伝統工芸品—

センターでは、「いすみ楊枝」を県内外に広く紹介するため、毎月高木守人氏に実演をお願いしています。

日時 毎月第3日曜日(9:30~16:00)

場所 ネイチャーセンター

講師 高木守人氏

参加料 材料費など実費いただきます

内容 楊枝・花入れ・茶杓作り など

編集後記

指定管理者として平成19~21年度まで担当していた財団法人千葉県環境財団が、引き続き今後5年間担当することとなりました。なお名称が一般財団法人千葉県環境財団と改まりました。最初のステージを終え、新たな5年間がスタートするに当たり、スタッフ一同いろいろなアイデアを出しながらセンターの新たな歴史を刻んでいきますので、今後ともよろしく願っています。

なお、長年「さとのかぜ」に寄稿していただいた森谷淵氏が本年3月6日にご逝去されました。享年78歳でした。いすみ市ではウミガメ保護監視員をされていました。ご冥福をお祈りします。 所長

行事への参加申し込み、お問い合わせは、電話(0470-86-5251)、ファックス(0470-86-5252)、または、直接センター事務室にお申し出下さい。定員のあるものについては、定員になり次第締め切らせていただきます。あらかじめご了承下さい。全ての行事はネイチャーセンターに一度集合してから移動します。

*eメール可(メールアドレス:senta-sato@isumi-sato.com(すべて半角小文字です))

*行事申し込み後、都合によりキャンセルする場合は必ず早めにセンターまでご連絡下さい。

◆ ◆ ◆ 利用案内 ◆ ◆ ◆

休館日：毎週月曜日(月曜日が祝日の場合はその翌日)、12月29日~翌年1月3日

開館時間：9:00~16:30、入館料：無料

※当施設のご案内や解説などを希望される団体は、2週間前までにお申し込み下さい。